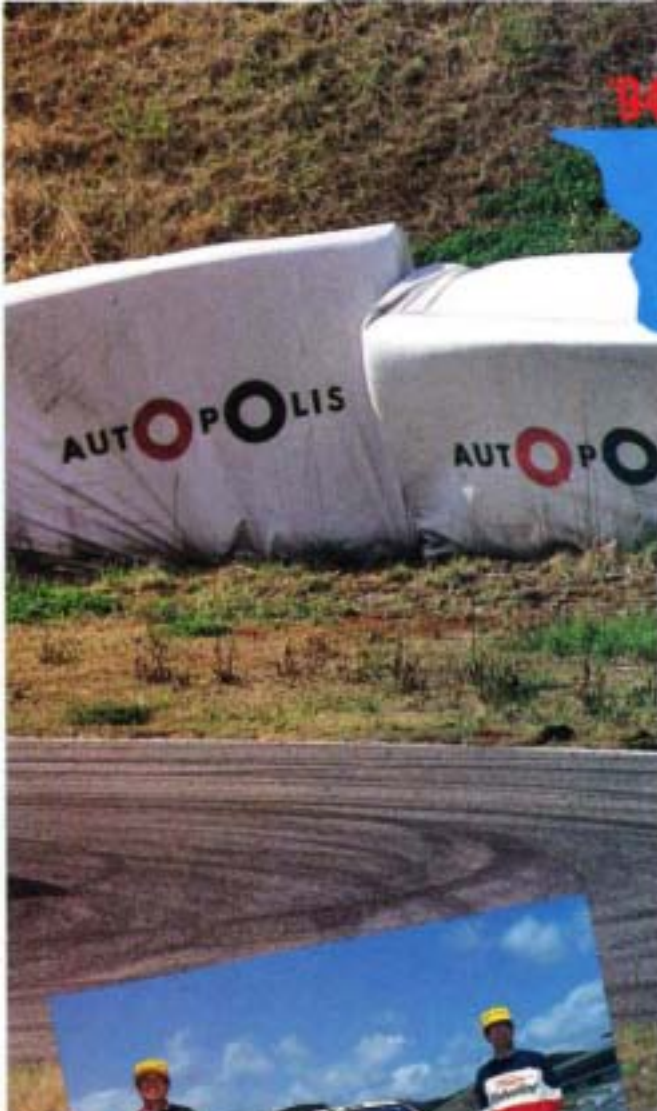


90.4月号

'94 JAF全日本ラリー選手権 [第3戦]

'94 ACK SPRING RALLY

■4月16~17日 / 大分250km



撮影・清木博志
報告・村井豊



山口博はSS総合トップであがったが、ラリー区間が合わずにC 4位。



松本(左)も高橋大輔ナビ。「オレの読みがさえた」と松本は自賛。



ハイアベで痛恨のスピン。だが速さは相変わらずの桜井幸彦がC 3位。

「出場できただけでも良しとしなければ」スタート前のドタバタを克服し高崎正博がC 2位。

丸1年ぶりのマコト節だった。'94年全日本ラリー選手権タイトル総戦の「ACK SPRING RALLY」は、松本誠が昨年引き続き続いて2連覇を達成し、相変わらず九州に強いところを見せつけた。

今回のACKはこれまでとは様相を一新した。ここ数年間、大分城島高原を起点として、ルートを西に取りながら周辺の林道ステージを主戦場とするコースをとっていた。ところが、今回は主戦場をさらに西に移して、大分阿蘇レーシングパークが舞台となった。SSはレーシングパーク内に限られ、林道は占有許可を取ったショートハイアベが勝敗を左右する区間として置かれただけだった。例年、





松本誠は1年ぶりの優勝。高崎と同減点。SS1のタイム差で勝利をものにしたが「これでチャンピオンはオレのもの」宣言が出た。

SS1のタイム差で決着！ 松本誠が逆転優勝をゲット

悪路を徹底して走らせるA.C.K.のスタイルを見慣れている者にとっては、若干寂しい設定に感じられたが、

「われわれとしても、ラリーは林道を思いきり走らせたい。でも、これまで使っていたコースがラリーの事前走行で荒れて、地元から強いクレームが上がり、使えなくなってしまう。それで、今回レーシングパークさんの多大な協力を得て、レーシングパークを起点にラリーを設定した。十数年ぶりにこのエリアでの開催ということで、今回はわれわれも極力無理はしないで設定しようと考えた」
(高橋健二競技委員長)

という理由のためで、またそろ一部の全日本ドライバリーのモラルが問われることになった。ただし、そこはA.C.K.林道SSがなくともナビゲーターを深読みさせるワナが随所に仕掛けられて、ラリー区間も単なる「計算ラリー」に終わらせなかった。

こうした設定のためか日、Cクラスは大混戦。とくにCクラスは、最後に設けられた深夜のサーキットSSで勝負が決まる、というさわどい展開となった。この戦いを制したのが冒頭に報告したように松本だ。

松本は今季開幕戦のD.C.C.Sをランサー・エボリューションで戦い11位と驚かず、第2戦TRCAをパス。念願のチャンピオン獲得のためには、絶対に落とせない状況に追い込まれてこのラリーを迎えた。クロズドコースのため、各選手とも事前のテスト、試走をこなし、松本も同様に数日前から現地入りしていた。マシンも、今回からやっとエボリューションIIが間に合い、ドライバリー、マシンとも万全の態勢に仕上げた。当日を迎えたのだ。

その松本と最後の最後まで死闘を繰り広げたのが、このラリーにはめっぽう強い高崎正博だった。だが、ラリー前の高崎は、松本とは対象的に慌ただしかった。水曜日にミッシ



峠道のラリー区間が響いた鎌田豊はB3位にとどまった。「しょうがないですね、次ですよ」



岡田孝一は惜しくもB2位。ハイアペの差が明確を分けたが「今季初としては上出来。ほくより餅くんを褒めてよ」と後輩を気遣っていた。

'94 ACK SPRING RALLY



SS1が終わり次のサーキットSSの前に情報交換をするCクラスのドライバーの団々。

用意していたために事なきを得て出場にこぎつけた。
 「2日間で、最低でも合計30時間以上の作業をメカニックがやって、何とか間に合わせてくれた」
 と、高橋は不眠不休の作業を強いられたメカニックをねぎらう言葉を残して、スタートしていった。
 両者を中心に、今季絶好調の桜井卓彦、九州の山口博、それに奴田原文雄、石田正史らが砂塵で絡んで、息もつかせぬ競争を展開して、ラリーは進んでいた。
 (112ページに続く)



勝田広がB優勝。「ヤッタ〜って感じ。ハイアペでホコリがなかったのが幸いした」と全日本戦初優勝を逆転でゲットして、今後に期待大。

得意の舗装SSにおどろかされた守屋紅陽だったが、栗津原には届かずA2位。



「四国(ダートラ)の借りは返した」栗津原豊は得意のブツぎりパターンで早くもA3勝目。

コンを壊して交換し、やっと直してテストを再開した翌木曜日に、今度はエンジンが壊れるというハプニング。幸いスベアエンジンを



■カートコースを使ったSS1、サーキットを2周するSS2、サーキットに付帯したダートの広場をタイヤで仕切ったSS3に、深夜のサーキット走行SS4。大分阿蘇レーシングパークの4本のSSで勝負がつくと思いきや、やはりラリーの勝負どころは山中にあった——。(報告・村井豊)

ラリーは、第3戦を制した西尾津次郎がブレイキのフルロケットでコースから飛び出すハプニングで幕を開けた。西尾はSS1のシケインでコースオフしてしまったのだ。規定により4輪駆動の場合は15秒の計時になるため、西尾は勝負をあきらめなければならなかった。

このSS1は、山口雄が1分10秒のベストタイムをたたき出した。1秒差の2番手には、村

集的な走りを見せた松井幸彦と石田正史が並んだ。石田は見事なドリフトコントロールで各コーナーを攻めた。右ヘアピンから左タイトコーナーなどは、

「みんなが何を期待してるかわかってますからね、やるっきやないでしょう。(笑)」

と、ブレイキングドリフトからパワーライド、振り返しを利用してドリフトでギャラリの喘ぎを浴びた。逆に松井

はハイドリアップタイヤを有効に使ったムダのない走り。松本誠はさらに1秒差で、後部美津雄や飯田原文雄と新井敏弘ら8選手とタイムを並べてのスタートとなった。

SS2ではサーキットを2周して争う。ストレートには速度リミッターが効いてしまうことを考慮して、コース上にスポンジパリアを4つ置き、スラロームさせるシケインが設置された。こ

こをブツちぎったのが怒りの西尾だ。うっぷん暗らしとばかりに、4分30秒をマークした。

上位陣では、山口が好調で西尾に1秒差も、そして、飯田原も山口と同秒をマークした。また、九州のトップドライバー富安敏昭も同秒で走りきっている。

ここでエントラントは、ダート用タイヤに履き替えて、SS3にアタックした。ここは、北海道王者田中伸幸が絶妙な走りを見せてアッチギリのベストタイム、なんと2番手を4秒も離す1分15秒をマークした。ライバルたちのなかでは、アドバン勢がチロイスしたM.T. 31が路

面に合ったように、田中に続いて山口、飯田原、大西康弘が19秒で走りきった。

3区間のSSが終わり、トップは好タイムを並べた山口だ。「まだ、本調子じゃなくて、3本ともそんなに気合が入ってる感じじゃないんですよね、それのほうがいいのかな」

トトップにも実感なしの表情だ。1秒差で飯田原がつけて大健闘の2番手。さらに3秒差で富安以降、後部と松井、大嶋浩夫と池田亨、松本と大西が1秒差のことに絞る。2秒差で石田正3秒差で高城、田口盛一朗、新井が同減点となっていた。

上位に変動が起きた7CP

ラリーは、ここから5・6kmのハイアペ区間を含んだ129

kmの第1ラリーステージへと向かう。8CPで構成されるラリー区間は、6〜7CPのハイアペと一部を除いてターマック。6CPまではさすがに日本ナビだけに、トップ陣に大減点はなく、勝負どころはやはりハイアペ区間だ。

チャンピオンズとチャンピオン宣言



1年ぶりのマコト節で



全日本ラリー選手権第1回
ALL JAPAN RALLY IN
ACK SPRING RALLY IN

6 C P直後はタ
イトなコーナーが
なく、52 km/hの
アペレージは物足
りなさを感ずるが、
頂上から下りにか
けて道が荒れ、タ
イトコーナーが続
く。ここでアペレ
ージが効いてくる。
加えて、大分名
物? 大量のホコ
リにも見舞われた。
このため、ミスコ
ースが繰出した。
ここは、ストレート

トからY字路までヘアピンに続
くコース。直進は舗装でホコリ
さえなければ道なりに楽にヘア
ピンをクリアできる。だが、ホ
コリがいたずらをした。
ここで上位陣に大きな変動が
あった。最も被害が大きかった
のは大西で、800mほどで行
き止まりになるが、大西はそこ
までいってしまい、大幅に遅れ
て80点もの大量減点を受けてし
まった。上位陣はほとんどの選
手が多かれ少なかれ直進してい
た。

また、岐阜美津原はこの区間
でバンク。石田は快調に走った
が、後半で加勢裕二がモッサリ
ントラブルでコース上に止まっ
ていて、左に余裕があったもの
の一時戸惑いが遅れとなった。
健闘していた新井も、ハイアベ
は苦手と叫び「中田さん(ナ
ビ)に怒鳴られっぱなし」で走
ったが、ズルズルと遅れてしま
った。逆に、ここで快走したの
がバルサーの高崎だ。
「キア比がピッタリだった。リ
ズム良く走れた」
と遅れを9秒にとどめた。さ
らに、松本もミスコースせずに
17秒遅れ。だが、桜井はミスコ
ースしたにもかかわらず、
「どうもハイアベは(頭の)キ
レが足りなくて、ミスコースし

てやっとなら、後半は取り
返せた」

という激走で、15秒遅れてあ
がったのだ。その前のラリー区
間も含めて、1スタを終了して
トップは高崎、桜井が同減点で
並び、3秒差に松本、山口が並
んで、3秒差で坂田、1秒差
で石田正、3秒差で田口という
オーダーだ。

2スタは、前記のハイアベを
3・40回、50 km/hにしてのシ
ョートハイアベと、最後に午前
2時、深夜のナイトサーキット
1周が勝負どころだ。だが、そ
の直前のラリー区間で上位4選
手は、ロードを確保なものにし
た。4選手以外は、

「急に距離が合わなくなった」
という坂田原の小田切順之助
に代表されるように、多めの
減点をくって後退。そして勝負
どころのハイアベを遅えた。こ
こで松本が勝負をかけて1点に
抑入、高崎、山口、そして石田
正が9点。逆に、桜井は輪滑の
スピンを喫し6秒遅れとなった。

これでトップ4は高崎、松本
(4秒差)、桜井、山口(対高
崎6秒差)に変わった。さらに、
ラリー区間で松本が2秒詰めて
勝負はサーキットに持ち込まれ
た。
「高崎選手に聞いたなら2秒差に

なったことがわかったから、最
後は思いきりいったよ。クルマ
が本調子やったら、もっとアチ
ッといけたんやけどな」

と松本。ベスト西尾の2分8
秒に3秒遅れと不満なタイムだ
が、
「1回目に松本選手に5秒、ベ
ストに11秒負けた。1周に減っ
たから半分として、松本選手に
2、3秒は覚悟した」

という高崎を松本は2秒詰
めて、同減点でフィニッシュ。規
定では、1 C Pから減点の少な
いほうが勝ちと決まる。結果、
ジムカーナの差で松本で軍配が
上がった。

「つまらんなバイロンタツチヤコ
ースオフして勝負をライにした
くなかったから、前半はかなり
抑えて走ったよ。後半はココ
(頭)の差やな、これでチヤン
ピオンに向けて弾みがついた。
あとは桜井が遠慮して、年寄り
をたててくれるか。だけやな
(笑)」

と久しぶりに手ぐすねひいた
マコト節を表彰式で披露して、
気分よく会場を後にした。散れ
たといえ健康な高崎は、
「夜になって、インタークーラ
ーの位置などで不利なバルサー
でも、パワーの落ち込みがなか
ったのが好結果を生んだんでし

